「高知県橋梁会平成 20 年度第 3 回研修会」報告

土木学会四国支部と高知県橋梁会の共催による本年度第 3 回目の研修会が，去る 12 月 19 日（金）に高知市本町にある高知会館の「飛鳥の間」で開催された。司会進行は，高知県橋梁会の安見和夫理事が担当。参加人数は 60 人。13 時 30 分からの研修会では，６テーマの講演があった。今回の研修会には，高知工業高校土木科 3 年生の４名が，４月から取り組んでいる課題研究の成果を発表された。

17 時 30 分より会場を「白鳳の間」に移し，恒例の忘年会が開かれた。参加者は 28 人であった。橋梁会理事の森下伸裕氏が株式会社鉄建ブリッジの代表取締役社長に就任されたので，宴会に先立って高知県橋梁会から花束と記念品をお贈りさせていただいた。

研修に先立ち，高知県橋梁会の右城猛会長から開会の挨拶があった。その中で，橋梁の新設工事がピーク時の 1/2，20 年前の水準まで激減していること，予算の関係で老朽化されても補修がされないまま放置されている橋梁があることが写真で紹介された。また，四国高等学校土木教育研究会が主催した橋梁模型コンテスト四国大会の審査員として高知県橋梁会も協力したという報告があった。

国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所の三戸雅文所長より「国土交通省に関する最近の話題」と題して講演があった。昨今，地方整備局と県の二重行政の無駄がマスコミで報じられているが，国と県では役割が異なるので二重行政にはなっていない。公共事業費の削減による社会基盤整備の遅れで国際競争力が低下している。高知県は特に道路整備が遅れているなどの問題点が指摘された。

創友の宮崎洋一社長は，「ワンデーレスポンスと TOC－CCPM 工程管理手法」と題して講演された。

これからは，住民，発注者，施工者の「三方良しの公共事業」が必要であり，そのためにはワンデーレスポンスと制約理論(TOC)に基づいた工程管理手法 CCPM が効果的であると力説された。

構営技術コンサルタントの友田一志係長は，「土佐黒潮牧場の概要と設計手法」について報告された。

土佐黒潮牧場とは，表層型浮魚礁のこと。土佐沖に 11 基が設置されていて，年間 6 億円の漁獲高を上げている。浮体を係留するチェーンの腐食や摩耗のため耐用年数は 10 年とのことであった。

株式会社アンプルの五十嵐恒夫調査役は，「木橋建設のすすめ・ヨーロッパの現状を踏まえ」と題して，最近のヨーロッパで架設されている木橋の紹介があった。ヨーロッパでは木のぬくもりに関心が高まり，木橋が増えている。ノルウェーでは 100t の戦車が通れるような木橋も架設されているということであった。

森林が豊富な高知県では，橋だけでなく土木構造物に木材を積極的に活用し，地産地消を図るべきと力説された。

ちなみに，五十嵐氏は住友建設に勤務していた当時に，ディビダーグ工法を日本に導入した先駆者の一人。

高知県立高知工業高等学校土木科 3 年生の高橋恒冶君，坂本敦紀君，中村隆之君，高島田明彦君の４名は，「災害と擁壁～南海地震時における筆山の擁壁の安全性～」と題して発表された。これは，清岡純教諭の指導の下に取り組んでいる課題研究。

擁壁の安定性に対しては排水対策が非常に重要であること，新潟県中越地震による擁壁被害状況の紹介，南海地震に備えての課題が発表された。

研究発表された 4 名の生徒さん一人一人に右城会長より記念品が贈呈された。

発表された 4 名の生徒と，課題研究の指導をされている清岡教諭

最後の講演は，高知県コンクリート製品協同組合

の田村滋副理事長。「最近のコンクリート製品」と題して，耐震性プレキャスト L 型擁壁，プレキャストガードレール基礎「プレガードⅡ」，大型 PC ボックスカルバート「スーパーボックスカルバート」,「レジンコンクリートパネル工法」,「コンクリートセグメント」の製品紹介があった。

熱心に聴講する 60 名の参加者

忘年会で，宴会に先立ち株式会社鉄建ブリッジの代表取締役に就任された森下伸裕氏に高知県橋梁会より花束と記念品が贈られた。

森下伸裕氏による謝辞

村山名誉会長による乾杯の音頭

忘年会の様子

二次会は，いつもの低価格の居酒屋「赤たぬき」で盛り上がる。偶然にも岡崎誠也市長が率いる高知市役所の忘年会と遭遇。私たちの座敷で岡崎誠也市長を囲んで記念撮影。

文責：右城　猛